

学習動機づけを高める支援方法についての考察

～学習動機づけと職業的アイデンティティの関連性の視点から～

A STUDY ON SUPPORTING METHODS FOR ENHANCING LEARNING MOTIVATION

～FROM THE PERSPECTIVE OF THE RELATIONSHIP BETWEEN LEARNING MOTIVATION
AND PROFESSIONAL IDENTITY～

大橋 孝子

OOHASHI Takako

キーワード：理学療法士養成短期大学、学習動機づけ、職業的アイデンティティ、支援方法

Key words : physiotherapist Training Junior College, learning motivation, professional identity, support method

要 旨

- 〔目的〕本研究の目的は、理学療法士養成短期大学における学生の学習動機づけを高める支援方法を探るために、学生の職業的アイデンティティと学習動機づけとの関連性について明らかにする事である。
- 〔方法〕理学療法士養成短期大学に在籍している1～3年生256名を対象に、学習動機づけと職業的アイデンティティに関する質問紙調査を実施した。3年生には、入学時から調査時点までの学習動機づけの調査を同時に行った。調査の結果を、単回帰分析にて分析した。
- 〔結果〕職業的アイデンティティの因子の、「自分の理学療法士観の確立」や「社会貢献への志向」と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」との相関が高い事が認められた。
- 〔考察〕理学療法士養成短期大学において、職業的アイデンティティを高める支援方法は学習動機づけを高める可能性が考えられた。
- 〔結論〕今回の調査では、職業的アイデンティティの因子と学習動機づけ下位尺度との関連が示唆された。今後、継続的に調査を行う事で、双方の因果関係や学習動機づけを高めることができる効果的な支援方法を示唆できるのではないかと考えている。

Abstract

- [Purpose] The purpose of this study is to clarify the relationship between the student's professional identity and learning motivation in order to find a support method to enhance the learning motivation of students at the physical therapist training junior college.
- [Method] We conducted a questionnaire survey on learning motivation and professional identity among 256 first- to third-year students enrolled in a physical therapist training junior college. In the third grade, a survey of learning motivation was conducted from the time of admission to the time of the survey at the same time. The results of the survey were analyzed by simple regression analysis.
- [Results] It was found that there is a high correlation between the factors of professional identity, "establishment of one's view of physiotherapist" and "intention to social contribution", and "identification adjustment", which is a subscale of learning motivation.
- [Discussion] At a physiotherapist training junior college, support methods for enhancing professional identity may enhance learning motivation.
- [Conclusion] This study suggests an association between occupational identity factors and learning motivational subscales. In the future, we believe that continuous investigations may suggest effective support methods that can enhance the causal relationship and learning motivation of both parties.

1. はじめに

本研究の背景として、最近の学生は「理学療法士になりたい」という明白な目的を持って入学しているにも関わらず、言われたことは行うがそれ以上はやらない、興味がないわけではないが疑問に感じて自ら調べるといふ行動を起こさない、というような「やる気」が感じられない学生が多くなってきているように感じたという事がある。この「やる気」を高める要因を明らかにすることができれば、「やる気」を高める支援方法が明らかになるのではないかと考えたのが研究のきっかけである。そのため、平成30年に理学療法士養成短期大学における職業的アイデンティティの視点から学習動機づけを高める支援方法を明らかにするために、職業的アイデンティティと学習動機づけとの関連性を明らかにする事を目的に、理学療法士養成短期大学に在籍している学生229名を対象に質問紙による調査研究を行った[1]。平成30年の調査結果では、職業的アイデンティティと学

習動機づけには、学年により相関の程度に相違があったものの相関がある事が認められた。職業的アイデンティティの各因子と学習動機づけ下位尺度の関係について分析した結果、1年生、2年生においては、職業的アイデンティティの第4因子である「社会貢献への志向」（理学療法士の社会への貢献度など）と、学習動機づけの「同一化的調整」（自分の価値として同一化する、勉強することが何らかの手段であったとしても自分にとって大切であるという意識によるなど）と「内発的動機づけ」（学習する事自体を目的とする、学習内容に興味や楽しさを感じる、自発的にとりくむなど）に高い相関が認められた。3年生においては、職業的アイデンティティの第1因子である「理学療法士選択の自信」と学習動機づけの下位尺度の「同一化的調整」に高い相関が認められた。学習動機づけに関する質問紙の下位尺度を表1に、職業的アイデンティティに関する質問紙の四つの因子を表2に示す。

本研究の目的は、継続的に調査を行い理学療法

表1 学習動機づけに関する質問紙の下位尺度

外的調整に関する質問	外的な力によって学習者の行動が生起する、他者からの強制によるなど
取り入的調整に関する質問	直接的な外的力がない場合でも、行動が生ずる、仕方なく、消極的な理由によるなど
同一化的調整に関する質問	自分の価値として同一化する、勉強することが何らかの手段であったとしても自分にとって大切であるという意識によるなど
内発的動機づけに関する質問	学習する地自体を目的とする、学習内容に興味や楽しさを感じる、自発的にとりくむなど

表2 職業的アイデンティティに関する質問紙の各因子

第1因子	理学療法士を選択した自信に関する因子
第2因子	自分の理学療法士観の確立に関する因子
第3因子	理学療法士として、必要とされることへの自負に関する因子
第4因子	社会貢献への志向に関する因子

士養成短期大学における学生の職業的アイデンティティと学習動機づけとの関連性について明らかにすることである。

本研究の仮説は、「職業的アイデンティティの形成の度合いの高い学生は学習動機づけが高い」として平成30年と同様に調査研究を令和1年に実施したので、令和1年の調査研究について以下に報告する。

2. 本研究の対象と方法

本研究の調査対象は、令和1年7月に理学療法士養成短期大学に在籍していた1年生93名、2年生85名、3年生78名、計256名であった。調査の実施時期は、入学後または進級後の7月であった。調査を実施した7月は、1年生においては前期の授業が終了し、臨床実習に行っていない時期であり、2年生においては、見学実習後約6か月経過している時期であり、3年生においては、見学実習、評価実習、そして総合実習を1回終了した直後であった。全学生に対して職業的アイデンティティに関する質問紙と学習動機づけに関する質問紙を使用した調査を実施した。また、3年生に対しては、入学から調査時点までの13の時期の学習

動機づけの変化を調査した。

本研究の調査に使用した質問紙は、著者が平成30年に実施した調査研究で使用した質問紙を使用した。学習動機づけに関する質問紙は、成田亜希が「進路自己決定度や進学動機が学習動機づけと学業成績に与える影響—理学療法士養成課程学生を対象とした調査より」の研究で使用した質問紙を使用し[2]、職業的アイデンティティに関する質問紙は、大橋ゆかりが「臨床実習教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果の研究」で使用した質問紙を使用した[3]。3年生に対して実施した学習動機づけの変化を表す質問紙は、著者が作成し平成30年の調査で使用した質問紙である[1]。調査結果の統計学的解析は単回帰分析にて行い、相関の強さを比較するために Pearson の積率相関係数を使用して解析をおこなった。P<0.05とし有意性を検証した。本研究における「やる気」とは、学習に対する「意欲」であり「学習動機づけ」の事である。職業的アイデンティティとは、「こんな仕事というイメージ」あるいは「自分なりの職業観」の事である。

本研究は、仙台青葉学院短期大学研究倫理審査委員会の承認を受け実施した。(承認番号3027)

3. 調査結果

本研究に同意し調査に協力した学生のうち有効な回答を得られることができた学生は、1年生87名（有効回答率93.5%）2年生67名（有効回答率85.9%）3年生51名（有効回答率85.8%）計205名であった。

3年生を対象に調査した、入学時から現在までの各時期の意欲の変化を表すグラフを図1に示す。縦軸は、意欲の高さを表している。

独立変数を職業的アイデンティティとし、従属変数を学習動機づけとして、単回帰分析を行った。全学生の相関係数とP値は $r=0.637$ $P=0.110$ 、1年生の相関係数とP値は $r=0.650$ $P=0.0006$ 、2年生の相関係数とP値は $r=0.660$ $P=0.3780$ 、3年生の相関係数とP値は $r=0.572$ $P=0.6237$ であった。（表3）

独立変数を職業的アイデンティティの各因子とし従属変数を学習動機づけとして単回帰分析を行った。全学生において最も高い相関を示したのは、職業的アイデンティティの第4因子である「社会貢献への志向に関する因子」であり相関係数は $r=0.629$ であった。各学年において最も相関の高い因子は、第4因子である「社会貢献への志向に関する因子」であり、相関係数は、1年生 $r=0.657$ 、2年生 $r=0.636$ 、3年生 $r=0.604$ であった。P値

は、いずれも有意差はなかった。（表4）

独立変数を職業的アイデンティティとし従属変数を学習動機づけ下位尺度として単回帰分析を行った。全学生および各学年において、最も高い相関を示したのは学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」であった。相関係数は、全学生 $r=0.749$ 、1年生 $r=0.776$ 、2年生 $r=0.757$ 、3年生 $r=0.619$ であった。P値はいずれも有意差はなかった。（表5）

独立変数を職業的アイデンティティの各因子とし従属変数を学習動機づけの各下位尺度として単回帰分析を行った。1年生と2年生において、相関を示したのは、どちらも職業的アイデンティティの第2因子「自分の理学療法士観の確立に関する因子」と学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」であった。1年生の相関係数とP値は、 $r=0.7455$ $P=0.0073$ 、2年生の相関係数とP値は、 $r=0.719$ $P=0.0015$ であった。（表6、表7、表8、表9）

4. 考察

3年生を対象とした入学時から調査時点までの意欲の変化については、入学後と夏季休暇後に意欲は低下し、臨床実習Ⅰ（見学実習）終了後に意欲は高まり冬季休暇後にまた低下する。2年生に進級し夏季休暇後と冬季休暇後に意欲は低下する。初めての長期実習である臨床実習Ⅱ終了後意欲は

表3 職業的アイデンティティと学習動機づけとの相関

*は有意差あり * $P<0.05$ ** $P<0.01$

	相関係数
全学生	$r=0.64$
1年生	$r=0.65^{**}$
2年生	$r=0.66$
3年生	$r=0.57$

表4 職業的アイデンティティ各因子と学習動機づけとの相関

	全学年	1年生	2年生	3年生
第1因子	0.58	0.57	0.63	0.50
第2因子	0.59	0.64	0.62	0.47
第3因子	0.55	0.52	0.63	0.44
第4因子	0.63	0.66	0.64	0.60

表5 職業的アイデンティティと学習動機づけ下位尺度との相関

	全学年	1年生	2年生	3年生
外的調査	0.06	0.06	0.08	0.06
取り入れ的	0.46	0.44	0.53	0.37
同一化的	0.75	0.78	0.76	0.62
内発的	0.63	0.66	0.67	0.59

表6 全学生 職業的アイデンティティ各因子と学習動機づけ下位尺度との相関

	外的調整	取り入れ的調整	同一化的調整	内発的調整
第1因子	0.05	0.45	0.69	0.57
第2因子	0.06	0.42	0.69	0.60
第3因子	0.07	0.38	0.64	0.56
第4因子	0.06	0.45	0.75	0.62

表7 1年生 職業的アイデンティティ各因子と学習動機づけ下位尺度との相関

*は有意差あり *P<0.05 **P<0.01

	外的調整	取り入れ的調整	同一化的調整	内発的調整
第1因子	0.05	0.68	0.68	0.56
第2因子	0.08	0.40	**0.75	0.68
第3因子	0.01	0.33	0.64	0.55
第4因子	0.06	0.46	0.79	0.64

表8 2年生 職業的アイデンティティ各因子と学習動機づけ下位尺度との相関

*は有意差あり *P<0.05 **P<0.01

	外的調整	取り入れ的調整	同一化的調整	内発的調整
第1因子	0.08	0.51	0.72	0.62
第2因子	0.05	0.50	**0.72	0.63
第3因子	0.14	0.49	0.67	0.65
第4因子	0.03	0.49	0.77	0.64

表9 3年生 職業的アイデンティティ各因子と学習動機づけ下位尺度との相関

	外的調整	取り入れ的調整	同一化的調整	内発的調整
第1因子	-0.03	0.38	0.55	0.53
第2因子	0.06	0.28	0.49	0.49
第3因子	0.06	0.24	0.53	0.43
第4因子	0.12	0.38	0.60	0.62

高まり、3年生の臨床実習Ⅲ（総合実習）終了後にさらに意欲は高まる。（図1）この結果から、学生の学習動機づけが高まる要因として考えられる事は、臨床実習で実際の理学療法士の業務を体感した事、理想となる理学療法士に出会えた事などが考えられる。そのような経験をした結果、職業的アイデンティティの形成度合いが高まり学習動機づけ（意欲）が高まったのではないかと考えられる。

中本久之らの回復期リハビリテーション病棟で働く作業療法士の職業的アイデンティティについての研究によると、「臨床経験を積むことで、作業療法士に求められる役割を理解し、その役割に対応すること」が職業的アイデンティティを高めるとしており、「ひごろより、臨床について作業療法士の視点で振り返りながら議論できる環境を作っていくことが専門性を高めることに有効である」と報告している[4]。学生も同じように、臨床実習を通じて理学療法士の役割を理解する事や、臨床実習指導者から理学療法士の視点でのフィードバックや臨床実習指導者との議論を通して、職業的アイデンティティの形成が高まっていくのではないかと考えられるのである。

職業的アイデンティティと学習動機づけの関係性については、1年生において有意な相関が認め

られたが、その他の学年においては有意な相関は認められなかった。しかし、1・2年生においては、職業的アイデンティティの第2因子（自分の理学療法士観の確立に関する因子）と学習動機づけ下位尺度「同一化的調整」、3年生においては、職業的アイデンティティの第4因子（社会貢献への志向に関する因子）と学習動機づけ下位尺度「同一化的調整」に相関は認められた。

1年生、2年生において、有意な相関が認められたのは職業的アイデンティティの第2因子「自分の理学療法士観の確立に関する因子」と学習動機づけ下位尺度の「同一化的調整」（1年生の相関係数 $r=0.746$ $P=0.0073$ 、2年生の相関係数 $r=0.719$ $P=0.0015$ ）であった。学生の学習動機づけを高めるためには、理学療法士の社会貢献について理解させることを支援する事は有効である可能性があり、学生自身の理学療法士観を確立させるような支援が、学生の学習動機づけを高めるために有効であるという事が考えられた。

以上の事から、1・2年生においては、理学療法士がいかにか社会に貢献しているか具体的な事例を教員が学生に示すことで、学生自身の理学療法士観の確立（自分なりの理学療法士の職業的アイデンティティ）が高まり、その結果学習動機づけの「同一化的調整」（自分の価値として同一化す

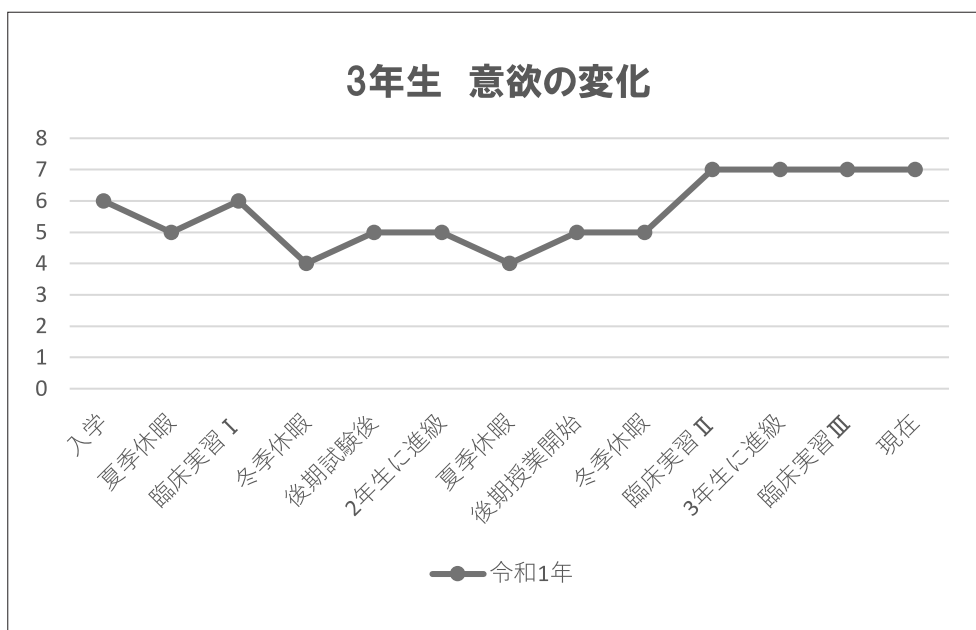


図1 3年生 意欲の変化 (平均値) 縦軸は意欲の高さを示す

る、勉強することが何らかの手段であったとしても自分にとって大切であるという意識による調整)が高まる事に繋がり、結果的に学習動機づけが高まると考えられる。つまり、学生の理学療法士に対する職業的アイデンティティの形成が高まれば、学習動機づけが高まる可能性があると考えられたのである。

3年生において相関を示したのは、職業的アイデンティティの第4因子である「社会貢献への志向に関する因子」と学習動機づけ下位尺度の「内発的調整」であった。(相関係数 $r=0.624$ $P=0.074$)以上の事から、3年生は自分が選択した理学療法士は社会に貢献できるという職業的アイデンティティが高まれば、学習動機づけ下位尺度の「内発的調整」が高まるのではないかと考えられた。「内発的調整」とは、学習内容に興味や楽しさを感じ学習に自発的に取り組むことである。3年生は、理学療法士の社会貢献について具体例を提示する事ができれば学生の職業的アイデンティティの形成を高める事ができ、その結果、学習動機づけ下位尺度の「内発的調整」が高まり学習動機づけが高まる可能性があると考えられる。3年生は、学習する事が理学療法士になるために自分にとって大切であるという事ではなく(同一化的調整)、学習内容に興味や楽しみを見いだし学習する(内発的調整)ことに繋がり、学習動機づけが高まる可能性があると考えられた。

今回2年生・3年生における職業的アイデンティティと学習動機づけの相関が認められなかった理由として、学生の職業的アイデンティティの形成は、実際に理学療法士の仕事を見たりするなどの経験が影響していると思われるが、学生の自分自身のアイデンティティの感覚も影響しているのではないかと考えられる。つまり学生個々の自分自身のアイデンティティの感覚の違いが職業的アイデンティティの形成に影響しているのではないかと考えられるのである。谷冬彦によると、アイデンティティには、精神的に中核をなすアイデンティティの感覚(中核的同一性)と現実的・社会的なアイデンティティの感覚(心理社会的同一性)の

二つの側面があるとしている[5]。つまり、アイデンティティは主観的なアイデンティティの感覚と社会的なアイデンティティの感覚に分けることができるのである。職業的アイデンティティは、後述の社会的なアイデンティティつまり心理社会的自己同一性と関連していると考えられる。学生の現実的・社会的なアイデンティティの感覚(心理社会的同一性)が職業的アイデンティティと結びつくのではないかとこの事である。

学生の学習動機づけが高まると主体的な学習に結びつくのであるが、この主体的な学習を促す要因として、自己同一性(アイデンティティ)の視点から畑野快は次のように報告している[6]。「大学生が自分自身の目指すべき自己や社会的自己(心理社会的自己同一性)を明確にすることができれば、内発的動機づけを高めさらに主体的に学ぶようになる可能性」があるという事を報告している。また、畑野快は、心理社会的自己同一性の変化と主体的な学習態度の変化には正の関連がある事を明らかにしている[7]。さらに、大学生の心理社会的自己同一性をどの程度明確に持っているか、またどの程度高い主体的な学習態度を有しているのかによってその後の大学での適応の過程が異なる可能性があることについても示唆している。理学療法士養成短期大学に在籍している学生の職業的アイデンティティの形成の度合いは、学生の職業的アイデンティティと関係していると考えられる心理社会的自己同一性の明確さに関連しているのではないかと考えられるのではないだろうか。理学療法士養成短期大学における学生の職業的アイデンティティと心理社会的自己同一性との関連性や、心理社会的自己同一性と学習動機づけの関連性について明らかにすることは、職業的アイデンティティと学習動機づけの関係性を明らかにするために必要ではないかと考えている。また、最近の学習動機づけの研究の動向について、鹿毛雅治がまとめている[8]。鹿毛によると「近年盛んに取り上げられるようになった動機づけ関連変数としてエンゲージメントを挙げる事ができよう。エンゲージメントとは、進行中の活動にお

いて示される行動の強さ、感情の質、個人的な労力投入に関する統合的な心理現象を意味し、コミットメントに特徴づけられた心理変数として、活動や学習の質を規定する」と、している。そして、「エンゲージメントは環境条件（課題や活動、他者など）が整う事で生じ、それは質の高い学びを実現するとともに社会的、認知的、人格的な発達にポジティブな影響を及ぼす」と述べている〔9〕。この事から、学生の学習動機づけを高めるためには環境条件が整う事が必要であると考えられる。教員自身そして教員の言動が学生を取り巻く環境の一つであると考えられることができるので、どのようにしたら学生に良い環境を提供できるのか考えていかなければならない。教員は、教員自身が学生の学習動機づけを高める事ができる良い環境となるためにどのようにしたらよいのか、常に心がける必要があるのではないかと考えられる。

5. 終わりに

本研究は、学生の学習動機づけを高める支援方法を探るために、職業的アイデンティティと学習動機づけとの関連性を明らかにすることを目的とした調査研究である。本研究の結果、職業的アイデンティティの因子と学習動機づけ下位尺度には相関が認められた。今回の調査は2回目である。平成30年の調査時に1年生だった学生が令和2年に3年生に進級する。令和2年に同様の調査を実施する事で、職業的アイデンティティと学習動機づけとの関連性の3年間の変化について縦断的に調査する事ができ、学習動機づけを高める事ができる効果的な支援方法を示唆できるのではないかと考えている。

COI 開示：本研究において、開示すべき利益相反関係にある企業・組織・団体はありません。

引用文献

〔1〕 大橋孝子：理学療法士養成短期大学における学生の学習動機づけとその支援方法についての1考察～職業的アイデンティティの視点から～. 仙台青葉学院短期大学研究紀

要, 2019; 1: 19-32

- 〔2〕 成田亜希：進路自己決定度や進学動機が学習動機づけと学業成績に与える影響—理学療法士養成課程学生を対象とした調査より. 白鳳女子短期大学紀要, 2014; 9: 29-38.
- 〔3〕 大橋ゆかり：臨床教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果. 理学療法学, 2006; 33: 311-317.
- 〔4〕 中本久之：回復期リハビリテーション病棟で働く作業療法士の職業的アイデンティティの分析. 総合リハ, 2018; 7: 657-664
- 〔5〕 谷冬彦：アイデンティティのとらえ方. 岡田努・榎本博明（編）, シリーズ自己心理学: 5 パーソナリティ心理学へのアプローチ. 金子書房, 2008, 6-21
- 〔6〕 畑野快：大学生の主体的な学習を促す心理的要因としてのアイデンティティと内発的動機づけ:心理社会的自己同一性に着目して. 発達心理学研究, 2014, 25, 67-75.
- 〔7〕 畑野快:大学生のアイデンティティの変化と主体的な学習態度の変化の関連:大学新入生の前期課程に着目して.発達心理学研究, 2015, 26, 98-106
- 〔8〕 鹿毛雅治：学習動機づけ研究の動向と展望. 教育心理学年報, 2018, 57, 155-170
- 〔9〕 鹿毛雅治：学習意欲の理論. 金子書房, 2018, 2-11